



第14図 米国における科学技術用高速コンピュータの推移。

それにつけても、ここで最後に高橋秀俊先生、やはり数年まえ東大を退官されましたけれど、この先生が一番嘆かれたのはソフトウェアという言葉でございます。高橋先生の著書から引用させて貰いますと、日本ではこれを利用技術と訳したのですが、これは本来は利用技術で

はなく、コンピュータを使って新しい物を作るのが、これがソフトウェアである。ところが当時日本の通産省、文部省のお役人さんにくら話しても、ソフトウェアと言ったらこれは利用技術である、ということで、さっき話しました、フォン・ノイマンの神経細胞のそういうものを分解して、仮説をたてて、そういうものを機械でこそ作っていく、そういうソフトウェアが全然日本で受け入れられないと、悲憤慷慨して書いておられますが、今でもそういう考え方があります。我々はこの立派なコンピュータ、これを使って本当に自然の事をソフトウェアでやっていく時期に80年代はなつたのではないかと思います。ということで、これからの人に大いに私自身期待したいと思いますし、私の役目も幕を閉じる時期だと思つて、私の話を終わりたいと思つて。(後記：講義の録音テープから本文への組み直しは、工藤 恵さん、新田 勲さんにご協力していただきました。)

第13期日本学術会議会員の選出について

日本気象学会理事会

日本学術会議会員の選出方法は第13期から改訂された。その要点は、登録学術研究団体が会員の候補者および推薦人を、関連する研究連絡委員会ごとに選考乃至指名し日本学術会議に届け出、この推薦人が研究連絡委員会ごとに定められた数の会員を選考することにある。日本気象学会は登録申請に際し、関連する研究連絡委員会として「地球物理学」を届け出たので、この場合についてやや具体的に要約すると次のとおりである。

- (1) 地球物理学研連からは日本学術会議会員2名と補欠1名を推薦できる。
- (2) そのため地球物理学研連で約10名の推薦人が「登録学術研究団体」より指名される。
- (3) 日本気象学会からは推薦人として約2名を指名できる。
- (4) 日本気象学会からは会員の候補者として、地球物理学研連の定員までの数を選定し届け出ることができ

る。

なお、詳細は増田善信(現)日本学術会議会員による報告(「天気」vol. 31, No. 7 428-429, および No. 10 649-651)を参照のこと。

これに対し日本気象学会理事会は、上記推薦人約2名を指名し、会員の候補者1名を選出する方法を審議し、次の結論を得た。

- (1) 本件に関し推薦委員会を設置し、その委員は理事会が選考する。
- (2) 推薦委員会が会員の候補者および、推薦人を選考し理事長に報告する。
- (3) 全学会員から会員の候補者の選定の際に対象とすべきものを募る(自薦を含む)。
- (4) 理事会は推薦委員会の選考結果に基づき、会員の候補者を選定し、推薦人を指名する。